

山ノ下遺跡～有力者の集落か～

山ノ下遺跡から出土した遺物には、掘立柱建物群の性格を考えるうえで重要なものが多くあります。青磁・白磁などといった中国の焼き物は、有力者しか持てない貴重な品物でしたが、山ノ下遺跡では、これらの食器に加え、壺や水注、合子といった高級品が用いられていたことが分かりました。

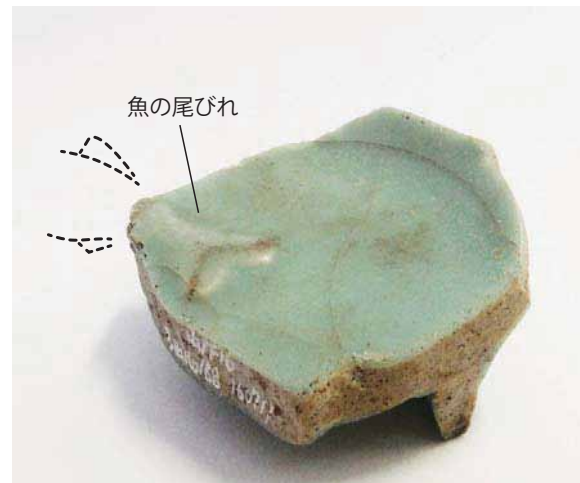
また、素焼きの土器のなかには、京都で使われていた皿をまねたものがかなり含まれていることも注目されます。このような皿は、奥州藤原氏の平泉や、幕府のおかれた鎌倉など有力な勢力の存在した場所で出土することが知られています。これらの遺物は、当時東伯耆に大きな勢力をもった武士である小鴨氏との関わりをうかがわせるものです。



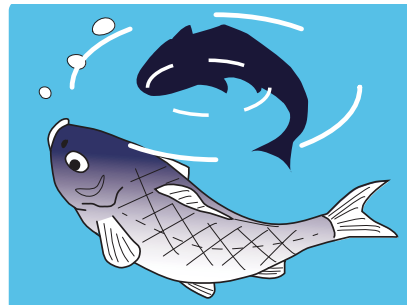
平安から鎌倉時代の青磁・白磁・青白磁



京都のものをまねた手づくねの皿



めでたい双魚文があしらわれた青磁坏



(公財) 鳥取県教育文化財団 調査室 〒680-1133 鳥取市源太 12 番地 Tel: 0857-51-7553 Fax: 0857-51-7550 メールアドレス: tottori@kyoubun.sakuratan.com HP: http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu_new.htm	(公財) 鳥取県教育文化財団 調査室 中部調査事務所 〒682-0021 倉吉市上井 503 番地 1 Tel: 0858-27-0570 Fax: 0858-27-0571
---	---

ロマンチック街道の



遺跡を掘る!



(公財) 鳥取県教育文化財団 調査室
中部調査事務所 広報誌

第2号 2018年2月28日

今年度、当事務所では、一般国道313号の改良工事に伴う小鴨道祖神遺跡と平ノ前遺跡の発掘調査、山ノ下遺跡(昨年度調査)と平ノ前遺跡の報告書刊行を行いました。ここでは、その成果の一部を紹介します。なお、作成した報告書は、図書館などに配架する予定ですので、一度手に取っていただきましたら幸いです。

小鴨道祖神遺跡

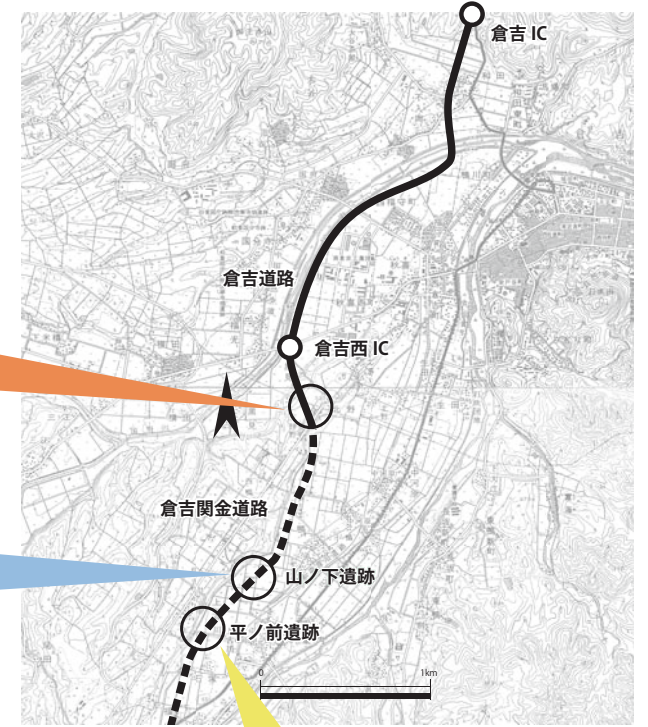
飛鳥時代から奈良時代(約1200～1400年前)のムラの跡がみつき、倉吉に国府がおかれたころの人々の暮らしを知るうえで、貴重な発見となりました(2～3ページ)

山ノ下遺跡

昨年度の調査では、平安時代から鎌倉時代(約850～950年前)の掘立柱建物群をはじめとする多くの遺構がみつきました。今年度の出土遺物の検討によって、掘立柱建物群を残したのが、この地の有力者であることが分かり、東伯耆に強い勢力をもった小鴨氏に関わる遺跡である可能性が高くなりました(4ページ)。



珍しい中国(越州窯系)の青磁の壺あるいは水注



平ノ前遺跡

2地区(A1区・P4区)の調査を行いました。A1区では、縄文時代から平安時代(約1000～3000年前)にかけて流れていた川の跡が確認されました。P4区では古墳時代の集落の一部と考えられる溝と、鎌倉時代の掘立柱建物が見つかりました。溝が埋まったのち、平ノ前遺跡にも建物が建てられるようになったようです。



A1区出土土器(右下2点が平安時代、他は縄文時代)



P4区で見つかった遺構

小鴨道祖神遺跡 ～飛鳥・万葉のムラ～

調査では、飛鳥時代から奈良時代（約 1200 ～ 1400 年前）の2棟の竪穴建物と、18 棟の掘立柱建物がみつかりました。天神野台地に広がっていたムラとそこに住む人々の暮らしはどのようなものだったのでしょうか？

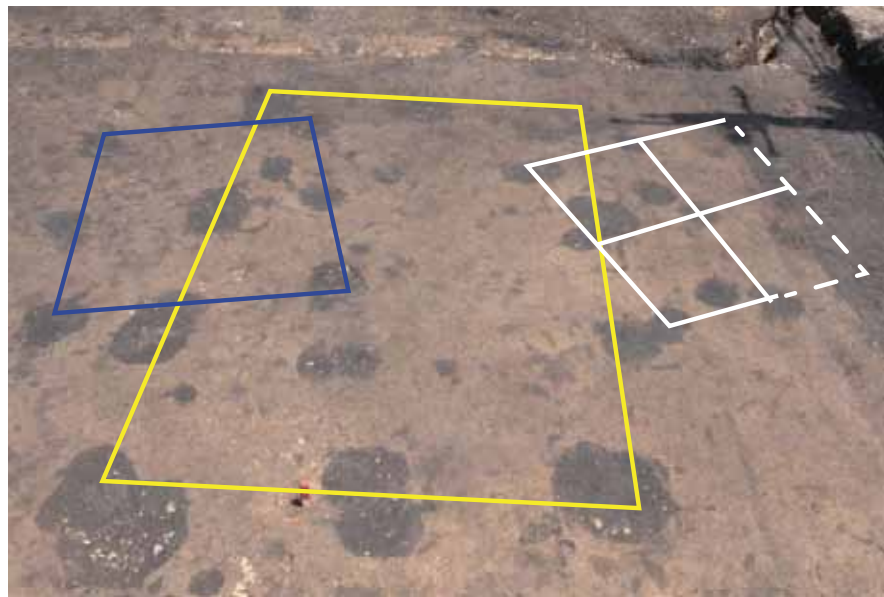
竪穴建物

2棟みつかった竪穴建物は、中央に火をたく炉が、壁際には床の水はけを良くするための溝が設けられています。いずれも掘り込みが浅く、柱の穴がみられないことから、簡単なつくりの建物であったと考えられ、一般の住まいとしての用途ではない可能性があります。



掘立柱建物群

建物の多くは、調査区の南東側で連なるようにみつっていますが、重なっている建物があることから分かるように、これらの建物はすべて同時にあったわけではありません。本遺跡でみつかった建物は、その向きによっていくつかのグループに分けられ、同時に存在していた建物を推定することができます。また、同じ建物を何度も建て替えることも行われており、右下の写真のように、柱穴がいくつも重なっている建物もありました。



掘立柱建物がみつかった様子

地面に黒いしみのように見えるのが柱穴です。黄色の大きな建物を取り壊したのち、青・白色の建物が建てられていることが分かりました。白色の建物は、内側にも柱があるそうはしらだてもの総柱建物で、高床の倉庫であったと考えられます



建物の取り壊しにともなうまつり

左上写真の黄色の建物は何度か立て直したのち、最後に取り壊し、柱を抜いたあとに土器をおさめていました。

ムラの移り変わり

出土した土器には、7世紀（約1300～1400年前）のものと、8世紀（約1200～1300年前）のものがあります。どの遺構から、どの時期の土器が出土しているか検討した結果、本遺跡では、竪穴建物と掘立柱建物で構成されていたムラが、やがて掘立柱建物だけになっていくことが分かってきました。先に述べた建て替え工事によって、ムラは少しずつその姿を変えていったのです。



7世紀の土器



8世紀の土器

出土遺物からみた人々の暮らし

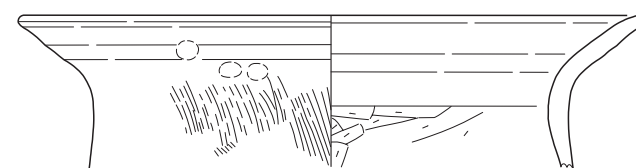
出土遺物からはムラの人々の暮らしがうかがえます。坏や皿といった食器、煮炊きに用いられた甕や土製支脚、塩を運んだ製塩土器などは、生きることに不可欠な食に関わる遺物です。

数点出土している土馬は、馬をかたどった土製品で、壊すことで災いを避けるためのまじないとしたものといわれています。また、掘立柱建物の柱穴から出土した桃の種も、霊力をもつと信じられていた桃をつかったまじないが行われたことを示すものかもしれません。さまざまな不安に負けないよう祈りをささげることは今も昔も変わらないようです。



土製支脚

2つ組み合わせて甕などを乗せ、煮炊きを行いました。



甕



製塩土器



桃の種



土馬

くら鞍をつけたもの、たてがみがあるものもあります。すべて壊れた状態で出土しています。